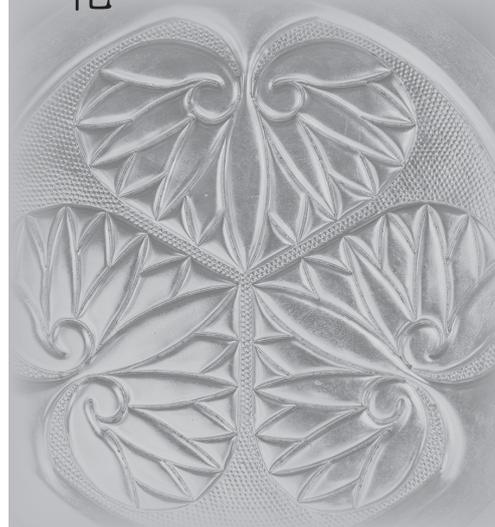


# 経営と健康

## 徳川家康、三度死す

### 第二回

講師 一龍齋貞花



武田信玄の銅像や肖像は、実は弟だとか影武者ともいわれ、1980年黒澤

明監督の映画「影武者」がヒットしました。ご覧になった方もおありと思います。

仲代達也さん主演、ハリウッドの大手スタジオから世界配給された最初の日本映画で3時間の長編でした。織田信長には5人の影武者がいたとの説もあります。度々危機に襲われる家康に影武者がいはいはずがない。

真似できないくせ

三方ヶ原合戦2年前の元龜元年姉川の戦いに、信長と合体して浅井・朝倉連合軍に勝利を収めるや本多正信が

「殿、岡崎城は信康殿に譲られ曳馬野にお移り下さい」

「ナニッ、女房子と別れて暮せというの

か」

「ハイッ、殿は切腹しようと言われて、敵軍へ討ち入ろうとされたり、この先が心配です」

「身体つきはもとより、くせをつかむのがわしの影武者であろう」

「ただ、どうしても真似できないくせがございます」

「なんじゃ」

「寝室でございます。奥方様と肌を合せられた時、他人には同じことは出来ません。これは人が違えばれてしまます。このくせばかりは指導出来ません。」

それに築山様は今川の出。今川の敵織田様と同盟を結ばれ、余りご機嫌がよろしくないように見受けられます。お好みの女性を用意致します。徳川家のためにもに備えてのお願いでございます」

いかな知患者本多正信でも、家康のテ

クニツクはわからないので教えられません。

「そうか、そこまで考えておるのか。よしよしうるさい築山と別れて暮すはなにより、好みの女子おなごを頼むぞ」

かくして本城岡崎を信康に譲り、馬を曳くというのはよくないと浜松と改めます。浜松城へ行って頂きますと私の浜松城の歴史講談が流れています。

家康は、正信の心配通り三方ヶ原で討ち死。この三方ヶ原合戦中に信玄は、肺炎或いは結核で死去。

上杉謙信は、天正6年3月会議中廁へ立ったが一向に戻ってこない。家臣が廁へのぞくと倒れている。

「殿……」

声をかけたが反応無し。梅干一個で一升酒。夜通し飲酒もするという大酒が原

因。しかも、

「余は、毘沙門天の生まれ変わりである」と、狂信的な面があり身代わりを立てようもなかつた。

側室どころか妻も持たず甥の景勝と、北条氏政の弟景虎を養子に迎えたが、後継者を誰と決めず急死。そのため景勝・景虎の相続争い。上杉に直江ありと言われた直江兼統の働きにより景勝が勝利し家督を相続。

後継も決めず健康をおろそかにして49歳で死んだ謙信、名経営者ならずです。

必死の伊賀越え

天正10年5月21日、信長から駿河一国を与えられた家康

「信長殿にお礼に参ろう」

わずかな供を連れ安土へ、信長の饗応を受け、

「徳川殿、秀吉が毛利攻めの先駆けを致しておる。余も近々京へ参る。貴殿も京・大坂・堺など楽しまれるがよからう」

5月21日、京都に到着した家康は洛中を見物、29日大坂から堺へ。

同じ日、信長はわずかな兵を連れて本能寺へ入った。

6月2日早朝信長に会見するため、家康は堺を出立し河内飯盛山まで。

「大事にございます。明智光秀の謀反により、信長公自害なされた由にございます」

「ナニツ、それは誠か。光秀とあつては岡崎へ帰ることはむつかしい。野武士、土民の手にかかつて死するは末代までの恥辱。この上は光秀と戦うまでじゃ」

家康に従うは、酒井忠次、榊原康正、本多忠勝、井伊直政、石川数正、本多正信、服部半蔵以下わずか20数名。

顔面蒼白、いきり立つ家康に正信が

「それは無謀、三方ヶ原をお忘れか。岡崎へ帰ることが肝要。半蔵、土地にく

わしい其方が頼り、頼むぞ」

「三河へ戻るには険しい山道がございませうが、宇治から南へ伊賀に入り加太峠を越えて伊勢へ。白子から船で三河を目指す伊賀越えが、一番危険が少のうございませう」

家康に取り立てられる前、伊賀の忍者の頭領であった半蔵、伊賀の忍者たちを説得して味方に引き入れ、要所要所に見張りを立て勝手知ったる土地とあつて、近くの寺に十王像の石仏があり、その一体を駕籠に乗せて家康の身代わりにしたおとり部隊を本隊とし、険阻な山道を越えて伊勢へ抜けようという行程。ところが野武士、土民が落武者狩りに手ぐすね引いて待ち構えております。おとり部隊であれ、家康本隊であれ、落武者とあれば容赦なく攻めかかつて参ります。

平八郎忠勝刀を振るい、半蔵得意の槍を振るうも道なき道、木々にはばまれ家康を守る者も散り散りばらばら。家康を守るはわずか数名。次々と現れる土民に野武士たちよき獲物と激しく攻めかかり、家康逃げんとしたが、獲物を逃がすなど繰り出した竹槍に、脇腹を突かれて影武者一号どうと倒れた。それと寄つ

てたかつて止めを刺し、刀、着物を引っぱがしそれをついで逃げて行く。諸所に於いて土民を蹴散らし、ようよう伊賀の忍者たちの働きで加太峠を越えてホツと一息。幸い同行させた影武者二号はわずかな傷を受けたのみで生き残っている。

ここぞと正信、二号を家康に仕立て上げ、なにしろ皆己れの身を守るだけでも必死とあつて、血まみれ泥まみれこのどさくさ幸いなりと

「殿はご無事でござるぞ。ご安心召されよ。おのおの方の働き見事でござつた」手負いの家来たちの顔にホツと安堵の色が。

最大の難所を突破し白子の港に着くや、ただちに船を仕立てて領地岡崎へたどり着き、本能寺の変から三日目に岡崎へ逃げ帰ることが出来たのでござりました。

身代わり二号となつた家康は、「よくぞ働いてくれた」と、伊賀の忍者たちを半蔵の配下として取立て、半蔵はのちに八千石を頂き江戸城内に屋敷を与えられ、今も皇居に半蔵門の名を残しています。半蔵の使つた槍が、半蔵が創建した四谷の西念寺に残されており、柄

が少し短くなったものの、私の後援会でご案内した折、持ち上げましたが重い重い、腹のところまで持ち上げるのがやっとうという重さでした。

正信はいついかなる時のためと、いつも影武者を同行させ、同じような服装をさせておいた周到な用意があつたから、家康2度目の死の窮地をも切り抜けることが出来たのです。

当初は不審がる者もいたが、正信は家存続の大事を説き優秀な側近はいずれも納得。家康公と立て身代わり二号も、一号同様育て上げられていたのでございます。

ところが、天正13年6月26日から背中に出来た腫瘍が悪化して重態におちいつてしまった。

今なら手術をして膿を出せば治るんですが、当時のことお灸をすえたりして大騒ぎ。

なにしろ平時であり城の中、正信もや身代わりを考え、側近以外に知られないようにするにはどうしたらよいか。又々の危機どのようなにして逃れますか、この続き次号のお楽しみ。パパン